

ダビデはサウル王にいのちを狙われ、王のもとを逃れ、逃亡生活に入りました。サウルの妬み、嫉みは狂気の域に達していましたから、ダビデを殺そうとするエネルギーはすさまじいものでした。着の身着のまま、何も持たずに逃亡生活を始めたダビデでしたが、いつのまにか彼の周りには400人ものダビデを慕う者たちが集まってきました。ダビデがエン・ゲディという場所の要害(洞穴があり隠れ場になっている場所)にとどまっているとき、サウルにダビデはエン・ゲディにいるとの情報が入りました。サウルは精鋭3000人の兵士を引き連れ、エン・ゲディに向かいました。

山羊の岩、と呼ばれる野生の動物しか近づけないような岩場があり、そこにサウルたちが向かった時のこと、サウルは用を足すため、一人でその場の洞窟に入りました。なんとその洞窟の奥の方には、ダビデとその従者の兵士たちが座っていたのです。入ってきたサウルには奥の方にいるダビデたちの姿は見えない。しかし、ダビデたちにはサウルの姿は見えたのです。

限られた短い時間です。兵士たちは小さな声でしかしはっきりと、ダビデにこう言うのです。「主があなたに、『わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。思い通りにするがよい、』と約束されたのはこの時のことです。」ダビデ、今こそ千載一遇のチャンスです。これは神があなたの敵をあなたの手に渡したということです、思い通りにしろとの、神の思し召しだ、そう言ったのです。ダビデはすっと立ち上がり、サウルの背後からそっと近づき、おそらくは長いマントのような上着のはしを切り取りました。ダビデは切り取った直後から、そのことを後悔しました。そして自分の兵士たちこう言ったのです。「わたしの主君であり、主が油注がれた方に、わたしが手をかけ、このようなことをするのは、主は決して許されない。彼は主が油注がれた方なのだ。」

目の前に自分を殺そうとして執拗に追いかけているサウルが無防備な形で居る。これはまさに神が与えた二度とないかもしれないチャンス。つまり神のご計画だと。王となるべきあなたの命を狙っているサウルを、今こそ、殺すべきだ、それは神の意志でもあろう、と兵士たちは言っているのです。ダビデが上着のはしを切って、後悔した、という短い記述はダビデの中にもほんのわずかであって迷いがあったということでしょう。

つまり兵士たちにとって神の意志と思われることが、ダビデにとっては必ずしもそうではなく、むしろ誘惑だった、試みだった、ということです。あることが神の意志であるかどうか、どうやってわたしたちは知るのでしょうか。

ダビデは上着のはしを切ったものの、思い定めて兵士たちに、「わたしの主君であり、主が油注がれた方に、わたしが手をかけ、このようなことをするのを、主は決して許されない。彼は主が油注がれた方なのだ。」と言います。

主が油注がれた方、とダビデは二度言います。兵士たちは今ここでサウルを思い通りにすることが神の意志だといった。だがダビデは、神の意志というのなら、神がサウルに油注ぎ、王として選んだ、ということこそ神の意志だ、そこに立ち戻っているのです。サウルをどうするかということが神の意志ではなく、そもそもサウルを選んだということが神の意志なんだ、というところに戻って、そこから動かないダビデがいます。サウルをどうするかということは、わたしが判断することではなく、神が判断し、神が裁くことだ、とダビデは言ったのです。

サウルはすでに神から王として退位するよう言われ、退ける、と言われた人です。ダビデがそのことを知っていたかどうか、聖書からはよくわかりません。だがダビデにとって大事なことは、神が油注がれた方なんだ、という一事なのです。たとえ、サウルが妬みや嫉みに心奪われ、狂気の人になろうとも、神が選ばれた者なのだ、ということが大事なのだ、とダビデは思っている。その人を自分の思いで、手をかけることを主はお赦しにならない、そうダビデは言うのです。

ダビデはこの後、サウルが洞窟を出たとき、後ろから歩み寄り、サウルに声をかけます。顔を地に伏せ、礼をして「ダビデがあなたに危害を加えようとしている、という噂にどうして耳を傾けるのですか。今日、神はこの洞窟であなたをわたしの手に渡された。殺そうと思えば殺せた。事実殺せという者もいた。見てください。わたしはあなたの上着の切れ端を持っています。あなたに近づき殺すことは十分可能でした。わたしの手には悪事も反逆もありません。あなたに対して罪も犯してない。それなのに、あなたはなぜわたしを追い回し、殺そうとするのか。わたしたちに間で起こることのすべては神が裁かれることであって、わたしが手を下すことではないのです。悪は悪人から出るということわががあります。もしわたしが悪人なら、今日のここで悪を働いたでしょう。だがわたしは手を下していない。あなたはたくさんの兵士を連れていったい誰

を追跡されておられるのか。一匹の蚤ですか。神が必要な裁きと救いを与えてくださいますように。」

サウルはこのダビデの言葉を聞き、声をあげて泣き、こたえた。「我が子ダビデよ。お前はわたしよりも正しい。お前はわたしの悪意に対し、善意を尽くしていた。今日、お前はわたしを殺すことができたのに殺さなかった。主がお前に恵みをもって報いてくださるように。今わたしは悟った。お前は必ず王となり、イスラエルの国はお前の手によって確立される。」

ダビデの真摯な訴えに対して、サウルは正気に返ったようにまともに応じています。サウルはダビデの正しいことと、ダビデこそが王位の継承者であることを認めたのです。にもかかわらずサウルはこの後、王位を退くことはなく、死ぬまで王位にとどまったのです。ダビデとの間に本当の意味で和解が成立したのかも、わからない。サウルは王宮に戻り、ダビデは要害にそのままとどまったというのです。正気に戻ってなお、王位から離れることができなかった、ということはサウルの狂気の深さともいえるし、闇の深さともいえます。

預言者サムエルから神はあなたを王位から退けるといわれ、その言葉を退け続け、ダビデを妬み始めてからのサウルは、悪霊に苛まれる。悪霊に苛まれるということは、自分の中の悪の部分が悪霊によって増長するということでしょう。悪霊がサウルを一方向的に悪の人のしたわけではないでしょう。サウルの中の悪が悪霊によって引き出された。しかし、サウルはただ悪霊にやられ続けたわけではなく、ダビデが今日の聖書箇所ですべて語った言葉を聞く耳を持っていたし、それに対して、真摯な応答をしているサウルもいるのです。サウルがダビデのことを正しい、と言ったのは意味深長で、たんにおれよりお前の方が正しい、と言ったのではなく、お前を殺そうとするおれを、殺すことができたにもかかわらず殺さないお前の人を赦そうとする態度、敵である者を赦す態度は正しい、恵みだといっているのです。ただ正しいだけでなく、自分に敵対する者を赦そうとする愛、つまり義と愛が共存する正しさだ、ということなのです。サウルはそのことを感じられる人でもあった。葛藤も当然あったでしょう。

しかし、サウルはダビデとの間で真の和解の関係を造り上げていくことも、ある種のハッピーエンドを迎えることもできないまま戦死していくのです。

それはサウルの中にある自分ではどうしようもない罪ともいえる。権力を握ってそれを手放すことが難しい人間の我も彼の中にはどうしようもなくあった。たとえ神の言葉と言えども、自分が嫌だと思ったら、断固として従わない罪がサウルの中にはある。どれもこれも自分ではどうしようもできない。それはわ

たしたちも全く同じ。人はそれを死ぬまで抱えていくのだ、ということを見ている。サウルを見ていて知らされる。

この物語がわたしたちに語っていることは何か、と思う時、人生の途上で、何が神の意志なのか、ということとはたびたびあるし、時には自分の都合や、自分の損得に合わせて、これが神の意志だ、と状況の中で思うこともある。だがそれが神の意志だ、とわたしたちが果たして言えるかどうか、判断できるかどうか、わからない。そうであるなら、わたしたちはこれはまちがいない神の意志だ、というところにその都度立ち戻るしかない。それはわたしたちにとって、イエス・キリストの十字架においてわたしたちの罪のためにご自分のいのちを差し出した愛、そしてそのキリストを復活させ、新しいいのちを与えてくださる、その神の愛の中で生きるよう招いてくださっている、それが神の根本の意志だ、ということです。ダビデはイエス・キリストを知らなかったけれど、彼がサウルに示した態度は、遥かにキリスト指さすものになっている。

神の意志、神のまことに立ち戻る。わたしたちの人生は、わたしたちのわからないことや、どうすればいいのか判断に迷うことに充ちている。

だが、大事なことは、神の意志に、神のまことに立ち帰ること。もう一度、あらためてそのまことを受けること。信じてそこから歩むこと。わたしたちもサウルのような罪を抱えている人間です。だからこそ、神のまことに立ち帰ることがどうしても必要なのです。